

現代の ことば



さいとう れいこ
齋藤 玲子

先日、勤務する国立民族学博物館(みんぱく)で「アイヌ工芸イン民ぱく」というイベントを開催した。公益社団法人北海道アイヌ協会が主催し、民ぱくのエントランスホールで同協会が認定する優秀工芸師による作品の紹介・実演、ものづくり体験という内容だ。アイヌ工芸の代表的なものは、木彫と刺しゅうである。小刀の鞘や盆などの木製品には、曲線と直線にうつろった文様などを組み合わせた緻密な彫刻が施される。刺しゅうは晴れ着など衣類の生地、直に文様を刺していくものと、別布を縫い留めた上に施す技法があった。これらの工芸品のなかにはそのままの形で作り続けられているものも、現代の生活に合うよう素材や用途を変えて生み出されたものもある。

伝統的に木彫は男性の、刺しゅうは女性の仕事とされ、今でも多くの工芸家がそれぞれ携わっている。しかし、大正から昭和初期の旭川で女性も土産用の木彫の小物を作っていたことが知られ、その後も人数こそ多くはないものの、なりわいとして木彫を手がけてきた女性はいく人いる。刺しゅうをする男性もいるだろうが、木彫をする女性に比べるとごく少数と思われる。こうした分業がどのように生まれ、変化しているのか、いないのかは、まだ十分に研究されておらず、これからの課題だ。

ものづくりの経験

狩猟用の矢をつくり、使ってみるというワークショップをおこなったときも女性のほうが多かった。そして今回も、木のコースターあるいは糸巻きに文様を彫るものと、コースター大の布に刺しゅうをする二つのプログラムがあったが、女性で木彫を選ぶ人が多かったのに対し、男性で刺しゅうを希望したのは4日間で1人しかいなかった。

その理由を考えるに、小学校の図画工作で小刀や彫刻刀を使うものの、刺しゅうは家庭科で必修ではないからだろうか、などとも思った。筆者が中高生の頃は、男子が技術で女子は家庭科と、別の教科内容だった。平成に入り、技術・家庭科が男女共修となって、男性が針と糸を持つことへの抵抗は小さくなったと思うのだが、人前ではやりづらいのだろうか。

男女差よりも気になるのが、木彫や刺しゅう作品を見た人の感想の変化である。「素敵なデザイン」「配色が良い」などとおっしゃる方は多いが、縫い目や彫りの細やかさに感心し、「時間がかかる作業ですね」と実感をこめていう人が、20〜30年前に比べて少なくなっている。展示資料の説明をしていると同様で、子どもや若い世代になるほど、ものがどうやって作られたかに関心が薄いようである。

手でものを作った経験が乏しいからだと思う。技術・家庭科で、家族・家庭における生活や消費・環境などの内容が増え、相対的に衣食住の知識や技術を学ぶ時間が減ったことと関係するだろうか。いずれも必要なことで、学校と家庭とどちらで教えるべきかの議論もあるだろう。だからこそ、博物館の出番と考えるべきか。国立民族学博物館准教授・文化人類学

さて、ものづくり体験のワークショップを開催すると、その内容にかかわらず、女性の参加者が多い。刺しゅうやミニチュアのござ織りの講習会はもちろん、一昨年、